

「ふう、こんなもんかな」

夏は終わったものの、まだ秋とは言い難い中途半端な季節。山の木々は押し付けがましい夏の日差しに疲弊ひへいしきつっており、さりとて色枯れには至らず、褪あせた緑を恥はずかしそうに晒さらしながら力なく頭こゝろを垂たれていた。一時期に比べると日差しは弱まり、風も少しだけ優しくなつたよ
うな気もするが、暑いんだか涼しいんだか、腰の据たわらないこと甚はなはだしい。

そんな緑溢れる果樹園で——穰せう子はひとしきり歌つてから一息吐いた。

ここは里を取り囲む小さな山、そのひとつ。遠くに頂だけがひよつこりと飛び出している妖怪の山とは異なり、ここには人の手がこれでもかと言わんばかりに入っている。林檎、梨、蜜柑など季節の果実を味わえるよう整地され、段々畑となつた山の中腹には林檎の木が大量に植えられていた。白い花弁の時期もとうに終わり、花弁の跡に小さな実が生なっていたが、まだ果実と呼べるほどの大きさではない。小さく、ほんのりと赤い、赤ん坊の実。

穰せう子は小さな実みに顔を近づけて、軽く鼻を鳴らした。

「うん！」

歌の影響か、小さな実の内側で微かすかに震えているのを感じる。歌に誘われ、振動が脈動へと変わり、生命を吹き込まれる喜びに震えている。そのひとつだけではない。風に揺れる全ての実が合唱するように小さな身体を波打たせている。まるで山そのものが震えているような生命の息吹を肌で感じ、穰せう子は満足そうな笑みを浮かべた。

歌は祝詞のりとであり祝福である。

もう少しすれば、素晴らしい赤がこの地を彩るであろう。

そう、秋だ。みんなが待ち望んでいた季節がもうすぐやってくるのだ。

巷ちまたで豊穰神と呼ばれてはいるが、まだ年若い穰子にできることなんて、最初からたかが知れている。甘いものをより甘く、赤いものをより赤く、そのためにちよつと力を貸すことくらいしかできない。

そしてそれすらも穰子ひとりの力というわけではないのだ。

土や水、そして風や木々が本来持っている力を歌によつて引き出しているだけ。

秋を彩る諸々もろもろのものにお願いしますと願うだけ、祈るだけ。

そしてそれでいい。

特別な力なんて必要ない。

だって秋は——それだけで完成しているのだから。

穰子は満足そうに果樹園を見渡すと、もう一度口元に笑みを浮かべて地面を蹴った。

空に飛び立ち、風を感じながら果樹園を後にする。ここだけではない、穰子の歌を待っているものたちはまだ大勢いるのだ。その全てに歌を届け、実りある秋を迎えることができるよう、今のうちに全てを回りきらなければいけないのだ。急がないととても回りきれない。山に川に畑に田んぼにと大わらわだ。てんやわんやのこんこんちきだ。

忙しい。

でも楽しい。

「これが生きるってことよねえ」

なんて、したり顔で呟つぶやいてみる。笑いながら空中で身体ひねを捻ひねると、纏まとった秋の香りがふわりと周囲に広がる。焼けた芋の香り。瑞々みずみずしい果実の香り。そして穏やかな風の香り。それらが入り混じった秋の匂いが、風に乗る、空に広がっていく。

まだまだ盛る森の緑に、一足早いお届けもの。

踏みしめた落ち葉、黄金色の麦畑、沈む夕日。

土に、風に、森に、秋を伝える道しるべ。先触れ。誘い水。そして——歌。

「こっちの水はあーかいよ♪」

赤く、赤く、何もかも赤く。

紅葉、熟れた果実、夕焼け、秋を示す赤色。

緑の森を見下ろしながら、全てが赤く染まる季節を待ちわびて、穰子は歌う。歌って踊る。

夏の残滓かげらを振り払うように、季節をぐるりと廻すように。

くるくる、くるくる、くるくると。

柔らかな風に乗る、回りながら森を越える。書き割りのような青空を、秋の香りを振り撒まきながら飛び続ける。森を抜け、山を越し、里を跨またぎながら、歌と香りを届けていく。

空が高い。

夏の圧し掛かるような空と違つて、雲があんな高いところにある。

重石が退けられたような開放感。重力から開放されたように、魂までも軽くなる。

「あ、お姉ちゃんだ。おーい」

山を二つほど越え、三つ目の山に向かつている途中、大きな銀杏の根元に腰を下ろす姉の姿を認めた穰子は、満面に笑みを浮かべてその隣に降り立った。

すでにこちらのことを見つけていたのだろう。

姉である静葉もまた、その名の通り静かに微笑む。

「ひっさしぶりー！ あっちで林檎が実をつけてたよー」

銀杏の傍に降り立ちながらそう告げると、姉はほっこりとほころんで、

—— あら、もうそんな季節なの？ ちょっととうたた寝をしていただけなのに、いつの間にか終わってしまったのかしら。早いものねえ。蝉は煩いから好きじゃないんだけど、ツクツクボウシの歌だけは結構好きだったのに。だってほら、なんだか聞いていると死にたくなってくるでしょう？ もう終わってしまったのかしら。残念ね、ほんとに。

なんて。

そんな表情を浮かべながら、ゆっくりと肩を竦める。

「ツクツクボウシなら先週終わっちゃったねえ。もう、お姉ちゃんのお寝坊さん！」

「つたく。ふつぎけんじゃねえですわよ……！」

先程から降り始めた雪／鬩り始めた夕陽／勢いを増していく風Ⅱもう半刻も経たないうちに前も見えないほどの吹雪と化す未来が目に見えかぶ。

茂みに身を隠してすでに一刻。このままでは気力よりも先に体力が尽きるだろう。

装備の確認——風呂以外では手放したことのない使い込まれた雑記帳／同じく使い込まれたオンボロのカメラ——それだけ。風を呼ぶ扇は家に忘れてきたし、非常食なり懐炉なりを収めているポーチは、先の戦闘ですでに失われていた。

「あいつら……絶対許さないからね」

失われたポーチを偲びつつ、何処の誰かもあるかどうか解らない神様に復讐を誓う。あのポーチは長年使っていたお気に入りのお品。この件に決着がつけられたら、たとえ何年掛かろうともあいつらに探し出させてやる。あいつら——敵Ⅱ白狼天狗の群れ。犬も狼も似たようなものだし、きつと探し物は得意なはずだ。首に鎖をつけて匂いを追わせてやろう。

射命丸文——黒曜石のような艶のある黒髪／サイドにだけ茶帯の紅葉柄をあしらった白いブラウス／意匠を共にした黒いプリーツスカート／とても冬山とは思えない軽装——はそんな風に思いながら、ぶるりと身体を振るわせた。

寒くて何かしら考えていないととても耐え切れそうにない。

怒りであれなんであれ、燃やせるものがあるなら何でも良かった。

雪は勢いを増す——ついでに風も唸りを上げる／全細胞が空腹を訴えている。

氣力が尽き掛け、なんでこんなことになっただろうと遠く思いを馳せていると、

「いたぞ！ こっちだ！」という叫びと共に、甲高い笛の音が響き渡った。

文は思考するよりも早く地面を蹴って空に飛び出す。振り向きもせず全力で風を切り、すっかり夜に染まった空を駆け抜ける。追いつめる氣配／鳴り響く笛の音／増えていく追跡者の数。

寒さと空腹で泣きそうになりながら、

「なんでこんなことになっちゃったのかなあ！」と思わず叫んでいた。

S

「というわけで、きみ、明日から大天狗ね」

「はっはっは、なに言ってるんすか頭大丈夫っすか？」

冬の空白のような暖かな一日——何か起きそうな素敵な予感／記者魂がうずうず疼き／さあ出掛けようかとした途端に、矢文による無作法極まりない急な呼び出し。不機嫌そうな顔を隠そうともせず天魔——天狗の世界で一番偉いやつ／血を分けた祖父——の下に訪れたものの、開口一番そう言われ、文の忍耐ゲージが一気にレッドゾーンを振り切った。

大天狗である。

世間一般で認知されている天狗そのものの姿——赤ら顔／異様なまでに高い鼻／むき苦しい坊主姿／首にぶら下げた幾つもしゃれこうべ——のアレである。アレになれと言うのである。

おまけにデカイ。大天狗というくらいだからものすごくデカイ。ダイダラボッチ——とまではないかないが、大天狗というものは見上げるような大男が常である。おまけに臭い。うら若き乙女を自称する文としては、そのようなものになるのは死んでも御免だった。

「どうか何です、いきなり……そもそも大天狗の座はずでに埋まっているでしょう？」

うむ——と気まずそうに顎鬚を摩りつつ／ついでに鼻毛を抜き／痛かったのか目の端に涙を浮かべながら——天魔は視線を逸らしつつ宙を見つめた。

「次郎坊のヤツが腰をやつちまっつてなあ……しばらく動けそうにないんよ。あやつも歳だし、そろそろ若いもんに席を譲りたいと常々言っておったからもう。その点、おまえさんなら経験も豊富じゃし、そろそろどうかと思つてな」

「お断り致します。他を当たってください」
取り付く島もない表情でぴしゃりと断る。

さて用事も済んだとばかりに立ち上がろうとした文を、天魔は慌てて引き止めた。

「いやおまえ、大天狗じゃぞ？ 偉いんじゃぞ？ 下っぱ天狗を顎で扱えるんじゃぞ？」

天魔——鼻の長い赤ら顔の老人／口元を隠す長い白髭／自宅で寛いでる感満載のド派手なアロハシャツに白の短パン／趣味の悪いサングラス——は断られると想像もしていなかったとい

う顔であんぐりと口を開ける。

「面倒だから嫌です。あと短パンで胡坐搔かないでください。見えてます、色々」と

「うひょつ」と変な声を上げながら、天魔ははみ出ていたものを仕舞った。わざとだったらセクハラで訴えてやろうと思っていたのだが、どうやら素だったらしい。それはそれで「ボケてんじゃねーのこのジジイ」という新たな感慨かんがいを湧き起こさせる結果になったのだけれども。

「おまえももういい歳じゃろうに……そろそろ身を固めんか？ 大天狗になったついでに婿のひとりでも見繕みつくろうがよからう」

「セクハラで訴えますよクソジジイ」

にこにこ笑顔のまま放たれた辛辣しんれんな言葉に、天魔はまたも「ひょつ」という変な声を上げた。今の世の中、社会で一番強いのは王様でも／神様でも／天魔でもない。女性権利擁護団体である——この団体に目を付けられた男は社会的に死ぬ／もしくは死ぬよりも辛い人生を送ることになる。

「いや、今のは失言であった。しかしな……大天狗というものは誰でもなれるというものではない。経験、実力、名声、その全てを満たすものしかできぬのじゃ。おまえには経験と実力は十二分にある。あとは名声だけじゃが……これは役に就いてから身に着けることもできよう。いつまでも売れない新聞なぞ刷ってないで、社会の一員としての責任をだな……つと何処どこへ行か！ まだ話は終わつたらんぞ！」

はーっと、大きく息を吐いてみる。

白く、ゆらゆらと、立ち昇る吐息をなんとはなしに目で追う。昨晚まで続いた吹雪もようやく止んで、今は抜けるような青空が広がっている。雲ひとつない青空に、自分の残した跡が拡散する、溶け合う、ひとつになつていく。

意味があるように。

意味のないような。

そんな取り止めのない感情を抱いて、早苗はやんわりと微笑んだ。

見渡せば辺りは一面の銀世界。

丁寧ていねいに均ならされた境内けいだいも、敷き詰められた参道も、そして神社そのものも、現在は全て白く塗り潰つぶされている。境内に飾られた置石おきいしも、参道に連なる石灯笼いしとうろうも、等しく雪に埋め尽くされ、その輪郭りんかくすらも曖昧あいまいだ。何処どこに何があるかもよく判らない。

ここまで積もつたのは久しぶりだ。

いつも強い風が吹いている此この地では、雪は降っても滅多に積もらないからだ。

雪景色に心躍らせ、童心に返つたような心地になつて、雪だるまでも作つてみようかしらんと思ひ立つた瞬間——ふいに横から声を掛けられた。

「今日も早いね、早苗」

振り向けば、雪で曖昧になつた石灯笼の上に一人の小柄な少女がいた。

少女の目より先に、むぎわらぼうし麦藁帽子に付けられた目玉と目が合う。

くりくりとした、どこか愛嬌のある丸い瞳。

「あら、諏訪子さま。おはようございます」

「うん、おはよう」

互いに礼を交わし、笑顔も交わす。

さつきまでその石灯籠いしどうろうの上には誰もいなかったことや、雪の上に足跡ひとつ残っていないことにも、早苗は特に驚いたりはしない。

だって諏訪子は神さまだから。

神さまは何処どこにでもいて、何処にもいない——そういうものなのだから。

「まだお休みだと思っていましたか」

「うん、まあ、そうなんだけどね。いつそ春まで寝てようかとも思っていたんだけど……それもまた気分さ」

不安定な石灯籠の上に、危なげなく座る諏訪子。

蛙のように身体を丸めている様は、座っているというよりもへばりついているといった方が正しい。

「しかし積もったねえ」

「積もりましたねえ」

示し合わせたように二人は同じ方向に顔を向け、どこまでも続く雪景色に目を細める。

鳥居の間から見える広大な景色——幻想郷。

山頂にある神社からは、その様子が一望できた。

雪、雪、雪。

山も、川も、里も、みな等しく白に染められている。

眩い太陽は、雲ひとつない青空を抜けて、白い世界を更に白く染め上げる。

まるで全てが輝いているような——祝福された世界。

「いや、本当に大したもんだ。ここまで積もったのはいつ以来だろうね」

「ここしばらく外出もできませんでしたしねえ。それにしてもいい天気。お日さまも久しぶりな気がします」

「どうせならあと一日くらい降ってれば良かったのに」

「あら、どうしてですか？」

「初日の出。どうせなら年の初めに相応しく、厳かな雰囲気に浸りたいじゃない？」

ああ、と早苗が得心したような顔をする。

今日は晦、大晦日。

鐘の音を聞きながら蕎麦を啜り、炬燵でごろごろしながら日の出を待つ——そういう日だ。

「違いますよ諏訪子さま。今日はこの一年で染み付いた心身の穢れを落とし、新たな年を迎

えるための準備をする日なのです。だというのに……吹雪の所為^せで買い出しにも行けませんでしたがねえ。これからが大変ですよ。この陽気なら二年参りにいらつしやる参拝客も多いでしょうし、振る舞い酒も用意しないとイケません」

早苗が軽く肩を竦^{すく}める。

大仰な物言いの割に表情は軽い、明るい。

「はん、どうせ早苗のことだから準備なんて粗方片付いてるんでしょ？ まーったく手際はっかよくなっちゃってさあ。可愛げないったら」

「まあ、これも巫女の勤めですし」

「ほーんと、よくできた嫁ですこと」

椰揄^{やゆ}するような諏訪子の物言いに、早苗は照れるでもなく柔らかな笑みを浮かべる。

昔は真っ赤になつて反論してたのになあとと思うと、諏訪子はやっぱり物足りなさを感じてしまった。

「そいや神奈子は？ まだ寝てんの？」

「みたいですよ。昨日は遅くまで飲んでらつしやいましたし」

「なーんか典型的なダメ亭主よねえ」

「神奈子さまはそれがいいんです」

きりつと。